

伝統芸能



私は、青木崇高はこれまで、伝統芸能を基にしたドラマに出演させていただいている。

上方落語の世界を舞台にしたNHK連続テレビ小説「ちりとてちん」(平成19~20年)、近松門左衛門をめぐる痛快劇「おかえもん」(NHK同28年)。そのほかNHK大河ドラマ「龍馬伝」「平清盛」「西郷どん」(同22年、24年、30年)など伝統芸能の指導の先生方が撮影現場に来られる時代劇への出演も多い。

現場では歌舞伎俳優や落語家、狂言師の方との共演もある。談笑をしたり一緒にご飯を食べたりするのだが、後日彼らの本職である伝統芸能を生で観ると「ああ、なんだことだ!」人を魅了する「化け物」じゃないか」と、気軽に話しかけていた自分を思い出し顔を赤らめるのである。

私は伝統芸能一家の生まれでもないし、伝統芸能に長く深く触れてきたわけでもない。不勉強であることはご容赦願いたい。いく普通な私の視点で伝統芸能に觸れたことを綴ろうと思つ。



私と
胸高鳴る
人たち



朝ドラ「ちりとてちん」



画・青木崇高

上方落語400年の歴史が目の前に立ちほだかる。ダラダラと流れる汗が稽古着を濡らす。いやあ難しいですね、などと少し余裕のあるふりをしていたが、稽古場を出た瞬間から顔は青ざめ、これはマズイぞ、と急いで帰宅し、録音した師匠の落語を何度も何度も聴き、ノートに書き写し、一日中ひたすらアップツ、ネタを繰り返した。そこから9ヶ月間、撮影と並行してその作業を続けた。

それがどれほど役

業を継続したことか、それこそ「ちりとてちん」の続編は?

(俳優)

「ちりとてちん」での役は、上方の落語家でヒロインの兄弟弟子、性格は直情的で落語バカの徒然亭草々という男だった。一方で、演じる私は、落語には触れたことがない、着物もひとりで着られなければ、お辞儀もきれいにできなかった。

撮影前の稽古場の初日。所作をひと通り習い、いよいよ林家染丸師匠の落語の稽古が始まったのだが、あれ、話すと動けない、動くと話せない。頭と体が噛み合わない。まったく思うようにできない。当たり前である。そう易々と習得されることはなく、師匠とてたまつたものではない。

上方落語400年の歴史が目の前に立

ちほだかる。ダラダラと流れる汗が稽古着を濡らす。いやあ難しいですね、などと少し余裕のあるふりをしていたが、稽古場を出た瞬間から顔は青ざめ、これはマズイぞ、と急いで帰宅し、録音した師匠の落語を何度も何度も聴き、ノートに書き写し、一日中ひたすらアップツ、ネタを繰り返した。そこから9ヶ月間、撮影と並行してその作業を継続したことか、それこそ「ちりとてちん」の続編は?

きない。直情的な性格だけが一致して

どうかは分からぬが、「ちりとてちん」は素晴らしい脚本、演出、音楽、スタッフ、キャストの力によって生み出され、のちに「朝ドラ思い出の名シーンランディング」で視聴者が選ぶ第1位を獲得するほどの好評を得たのであった。バチバチバチ。

放送中にこんな話を聞いた。「南米でも、毎晩『ちりとてちん』が放送され、楽しく見てくれている日本人移民の方が大勢いるらしい」。その年がブラジル移民百周年であることにちがいない。直情的な性格だけが一致して

周りの協力も得てブラジル、ペル

ー、パラグアイの日本人移住区を1ヶ月かけて回り、訪れた各地で大歓迎を受ける中、必死に覚えた落語「道具屋」を一席披露した。

完成度は高くなかつただろうが、移民の方にはたいそう喜ばれた。「草々兄さんがやって来た」と現地の新聞にも載った。懇親会で聞いたおじいさん

おばあさんの移住当時の壮絶な苦労話は忘れない。「国境」「歴史」と

「ドラマ」。そしてそれらをつないでくれた「落語」に改めて感謝した。

これが伝統芸能「落語」との出会いである。私にとって「落語」は人生を切り拓き、豊かさを与えてくれたものである。

あれから早いもので12年経つ。落語家の役はそれ以来演じていない。どう

うだらうか、それそつ「ちりとてちん」の続編は?

あおき・むねたか 昭和55年生まれ、大阪府八尾市出身。映画、テレビ、舞台などで活動。バラエティー番組「セブンルール」(関西テレビ系)に出演中。映画の公開待機作に「るろうに剣心 最終章 The Final」(大友啓史監督)、「朝が来る」(河瀬直美監督)などがある。「八尾の魅力大使」として八尾市のPR活動も行う。趣味は絵画、旅など。